

ふたばグラウンドデザイン（中間報告）

平成 31 年 3 月 16 日

ふたばグラウンドデザイン検討委員会

ふたばグラウンドデザイン 目次

1. 始めに（背景）	1
2. 現状認識と課題	2
3. 基本理念	6
4. 基本目標	7
5. 基本構想	8
6. ふたばの将来像	14

1. 始めに（背景）

東日本大震災及び東京電力株式会社福島第一原子力発電所事故（以下「震災」という。）により甚大な被害を受けた双葉郡は、全郡避難を余儀なくされ、全てが「ゼロ」からと言うより「マイナス」からのスタートとなった。各町村においては帰還を目指すことから復旧・復興へ向けてまちづくりが始まった。

しかし、各町村の復興の時間軸が異なり、避難指示が解除され既に8割の住民が帰還したところもあれば、いまだに全域に避難指示が出ているところもあり、各町村がそれぞれ異なる困難に直面している。

「ふたばの復興は、震災前以上の繁栄を目指すことではないのか。」

震災前のような「普通の暮らしが出来る地域」更には「震災前以上の繁栄を遂げられる地域」これらの達成を目指し、双葉郡全体が復興して初めて復興が成し遂げられたと言えるという共通認識の下、双葉郡が一体となり自ら「明るい未来の双葉郡」の姿を思い描き、希望を持って進んでいけるよう、まさに **目標となる「絵」**が必要ではないかと検討を進めてきたところである。

世界の叡智を結集し、一日も早い安心できる地域づくりと震災前以上の繁栄を目指し、持続的発展に向け総合的に力を結集し取り組んでいく必要がある。

各町村の置かれた現状と将来見通しをベースとして、夢と希望が持てる「明るい未来の双葉郡」の実現の第一歩としてふたばランドデザインを策定し広く示すこととした。

2. 現状認識と課題

(1) 現状認識

① 千年に一度の自然災害と原発事故の未曾有の複合災害からの復旧復興

2011年3月11日（平成23年）14時46分18秒、宮城県牡鹿半島の東南東沖130kmを震源とする東北地方太平洋沖地震が発生した。地震の規模はマグニチュード9.0で、発生時点において日本周辺における観測史上最大の地震である。

震源域は広大で、岩手県沖から茨城県沖までの南北約500km、東西約200kmのおよそ10万km²に及んだ。最大震度は宮城県栗原市で観測された震度7で、宮城・福島・茨城・栃木の4県36市町村と仙台市内の1区で震度6強を観測した。

この地震により、場所によっては波高10m以上、最大遡上高40.1mにも上る巨大な津波が発生し、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害が発生した。

地震動と津波の影響により、東京電力の福島第一原子力発電所で発生した炉心溶融（メルtdown）に起因する水素爆発により大量に放射性物質が放出したため、史上例を見ない大規模な原発事故となってしまった。

原発事故は、近隣市町村の住民にとって自然災害とは違った恐怖感を生み、多くの人々の心にいたたまれない不安感が広がり、消えにくい心の痛手ともなった。

また、大地震と大津波による被災に加えて、原発事故・風評被害等の未曾有の複合被害となり歴史的にも、世界にも例のない悲惨な状況が発生させた。

② 大震災による地域存続、コミュニティ崩壊の危機

大地震と大津波から、多くの被災者が家を追われ、あるいは原発事故の不安から遠方へ避難を余儀なくされるなど大混乱が続いた。このことから、人々の地域としての繋がりは失われ、家族同士すら消息不明の時間があった。

さらに、放射性物質による汚染の影響により多くの住民が帰宅困難に陥り地域喪失、元々のコミュニティは崩壊に瀕した状況となった。地域存続とコミュニティ崩壊の危機的状態である。

③ 全郡避難、「ゼロ」からの、あるいは「マイナス」からの再生・復興

原発事故は、全町避難を発生させ、多くの人々がふるさとを離れざるを得なかった。避難指示区域及び周辺地域から10万人を超える人々が着の身着のまま長い避難生活を送らざるを得なくなった。

誰もいなくなったところから、原発事故による風評に打ち勝ちながら、再生・復興への方向が示された。まさに、「ゼロ」からというより、大きなハンディを背負った

「マイナス」からの再生・復興という長く険しい道のりを歩むことになった。

被災 8 町村は、それぞれに帰還を目指し、復興計画を策定した。まずは、インフラの復旧再生への取り組みから復興を目指すこととなった。

④ 生活回復が望まれる生活環境

原発事故により、各地で高濃度の放射能汚染地域が発生した。生活を送る上での健康不安がつきまとう状況となり、「帰還困難区域」（年間 50 mSV 以上）「居住制限区域」（年間 20～50 mSV）「避難解除準備区域」（年間 20 mSV 以下）の区域区分がなされた。

政府として帰還を目指すことを政策方針とし、まず生活環境の回復が優先され除染作業に取り組むこととなった。安心・安全を確保するために、長期目標として空間線量を 1 mSV/年 にすることとして各地で除染作業が行われた。

安心して生活を送れる環境を取り戻す努力は、いまだ続けられ、限りない低線量、あるいは被災前の環境となり、安心安全の生活環境が確保されることが望まれる。

⑤ 廃炉汚染水対策の安心安全確保と対策の長期化

東京電力福島第一原子力発電所の廃炉には、30～40 年かかると言われている。燃料棒の取り出しやデブリ除去など対策は多岐にわたり、且つ可視状況になく炉心部等は高線量に覆われ、ロボットによる調査や除去作業技術の開発に取り組まれているが、時間がかかるとみられる。

東京電力福島第二原子力発電所は停止中であり、安定管理されているとはいえ、長期的な対応は今後示されると思うところである。

廃炉汚染水の日も早い安心安全が確保される状態となるよう対策が望まれる。

⑥ 帰還困難区域の解消と先行き不透明感

帰還困難区域の取扱方針が平成 29 年 9 月に出され、各町村に於いて、平成 29 年～平成 30 年初めに於いて、「特定復興再生拠点整備計画」が策定・認定され、インフラ整備と併せ除染作業の取り組みがなされている。当該計画区域は、95～600ha 程度であり、全域を除染されるよう望む地域の声に全面的に応えた状況とはなっていない。

除染区域を拡大し、全域での生活環境の回復が確保されることが双葉の復興が成し遂げられる第一歩と言える。一日も早い、環境回復を図る努力が望まれる。

⑦ 復興ステージの異なる双葉地方 8 町村

大震災及び原発事故から 8 年を経過し、次の復興ステージを目指そうとする町村がある一方で、まだスタート台にも立っていないとも言える町があり、双葉 8 町村が置かれている状況は、それぞれに余りにも違いがあり過ぎ、多様な状況にある。

また、課題もそれぞれに、復興の進展により新たなものも見えるなど、尽きないものとなっている。それぞれの拠点づくりにはまだまだ 8 町村とも多くの課題を抱えながら、一つ一つ解決し続けなければならない。

⑧ 見通せない将来人口と産業再生

各町村の住民アンケートに於いて、「帰還する」「帰還を考えている」「迷っている」等の区分人口が、時間と共にまた各町村の復興状況により変動を繰り返している。復興目標人口に対し、帰還人口は、緩やかな伸びの傾向にある。帰還人口の状況から見るに、将来人口がどのようになるか不透明と言わざるを得ない。

避難企業の帰還も遅々とした状況にあり、「生業の再生」が見通せない状況にある。

(2) 課題

- ◆安心安全な環境整備と災害に強いまちづくり
- ◆未来の地域を担うひとづくり（教育環境の整備）
- ◆医療、福祉、介護等へのきめ細かな対応
- ◆農林漁業など生業再生と生産性向上
- ◆新たな雇用の場となる新産業の創出
- ◆地域コミュニティの再生と絆づくり
- ◆便利で心豊かに暮らせる魅力的なまちづくり
- ◆地域交通網と高速交通網の構築
- ◆広域連携によるインフラ整備・維持管理
- ◆訪れたい「観光資源」の開拓など交流人口の拡大
- ◆新エネルギーを活用した産業創出

双葉地方の8町村が抱えている共通の課題を、「福島12市町村将来実現ロードマップ2020」及び各町村の復興計画、総合戦略に掲げられている方針や施策から整理した。

全ての町村において安心・安全な環境整備と災害に強いまちづくり、未来を担う地域を担うひとづくり、医療・福祉・介護の充実、生業の再生、新たな産業の創出による継続的に雇用を生み出すまちづくり、地域コミュニティの維持・再生や心のつながり絆づくり、便利で心豊かに暮らせる魅力的なまちづくりを重点課題として取り組んでいる。

このほか多くの町村が広域アクセス利便性の向上と地域の生活交通の充実、地域インフラの整備・まちづくり・広域連携、新しい人の流れ地域外との連携・交流の拡大、新エネルギーを活用した産業創出を施策として取り組んでいる。

3. 基本理念

「ふたば」の夢あるみらいづくりを目指そう
(「ふたば」の思いは一つ)

山積する課題を克服し、未来に続く「ふたば」を実現しなければ、ふるさとを愛している人々の願いを達成することはかなわない。歴史的な大災害を受けたこの地域が、このままでは震災前どころか、消え去り忘れ去られてしまう恐れがある。そんな、危うい状況にここ「ふたば」は立っている。

双葉地方が、未来に存在し続けるために、震災前以上の姿を取り戻して初めて復興が成し遂げられるということの再認識・共通認識のもと、夢を夢で終わらせない実行力と持続的発展への努力を傾注し続けなければならない。

「ふたば」の未来は努力なくして、多くの人々の関わりなくして、訪れては来ない。双葉地方復活のために未来を見据えた夢の確実な実現が大切なのである。

このために、永遠に続く未来に向かって、「夢あるみらいづくり」を目指すのである。この決意表明を「基本理念」とするものである。



4. 基本目標

- 「いつまでも」 続くふるさとふたば
- 「いつまでも」 活力あるふたば
- 「いつまでも」 続くふたばの絆づくり
- 「いつまでも」 笑顔が絶えないふたばのこども
- 「いつまでも」 健康長寿のふたば

「ふたばの復興が成し遂げられる」ために、「震災前の姿あるいはそれ以上の繁栄」、「永久に続くであろうふたばの繁栄」を目指すために、掲げ上げられるべき「目標」を設定しなければならない。

「いつまでも」を大切な思いとして、復興を成し遂げる人と人とを、永遠に繋ぎ合い、ふるさとふたばの未来を夢見る決意と覚悟を持って永続的に突き進まなければならない。



5. 基本構想

永久に続く未来に向かって、「夢あるみらいづくり」を目指すことは、復興を成し遂げるまでの絶えることのない努力の積み重ねが肝要である。

「ふたば」の夢あるみらいづくりを目指そう

この基本理念の達成のために、基本目標に「いつまでも」を繋ぐ心や、ふるさとふたばの永続性を願う思いを託したところである。

この基本目標をさらにより確かなものとするためには、「ふたばの復興が成し遂げられる」ことが必要でありそれは、「震災前あるいはそれ以上の繁栄」とすることに他ならない。

このためには、長期ビジョンとして地域の人口、総生産が震災以前を上回ることを目指した未来志向の復興政策が必要不可欠である。このことから、下記の6本の柱と郡内・郡外との連携推進による基本構想としたものである。

(1) 基本構想6本の柱

① 安心安全の確保 廃炉・汚染水の安心安全対策 生活環境回復
② 生業の再生・新産業の創出 福島イノベーション・コースト構想と新産業 農林水産業再生新展開と多角産業化
③ 広域連携を支える地域交通システム 広域連携・高速交通・防災ネットワーク
④ みらいのふたばを支える人づくり 高等教育機関・ベンチャー誘致
⑤ 復興シンボル交流拠点整備・利活用促進 交流人口200万人構想
⑥ 住んでみたい魅力ある地域づくり 医療福祉・文化・娯楽・食と癒し

☆ 基本構想の考え

① 安心安全の確保

一日も早く、安心して生活できる環境となるためには、廃炉汚染水対策に万全を尽くすことは当然であり、着実に且つ早期に、安心安全が確保される必要がある。

また、安心して生活が送れる環境を取り戻すための除染作業を一刻も早く完遂し、被災前の安心安全な生活環境を確保することが必要である。

② 生業の再生・新産業の創出

ふたばの復興が成し遂げられるためには、福島イノベーション・コースト構想の実現と新産業の創出により、地元企業の事業再開を促すと共に、新規事業者の誘発誘導を図り、農林水産業の再生・新展開も含めた多角産業化の進展が図られるよう取り組まなければならない。このことから大震災以前以上の産業活力が得られよう取り組む必要がある。

また、廃炉も産業の一つという観点から復興事業として捉え、ロボット技術開発を含め施設管理等を事業と位置付け、地域発展に繋げることも必要である。

③ 広域連携を支える地域交通システム

リダンダンシーの確保、大自然災害時の広域避難路の確保、復興に向けた中通り地方と南北に連なる大都市とを結ぶ高速交通ネットワークはもちろん、復興拠点間ネットワーク形成による地域連携強化等に取りインフラの整備促進が必要である。

また、未来志向のスマートコミュニティづくりを目指した新交通システム（いわゆる自動運転社会）導入を図り、ハードソフト両面から住みやすい地域づくりに資する必要がある。

④ みらいのふたばを支える人づくり

ふたばの復興を長期視点から捉え、人づくりは社会基盤づくりの土台であり、未来に続く地域を考えれば非常に重要なことである。

復興進度の違う状況に対応できる教育システムおよび制度そのものにもイノベーションを図って行く必要がある。

また、この地域の特性に合った技術革新の世界的牽引となるような理工系高等教育機関の設置が必要である。

⑤復興シンボル交流拠点整備・利活用促進

ふたばの復興には、交流人口の拡大が必要であり、復興ツアーのみならぬ関係人口・交流人口の受け皿の充実を図る必要がある。

ハードソフト両面から取り組み、拠点整備と利活用促進策を積極的に図らなければならない。

復興シンボルとして、J ヴィレッジの施設充実と多様な利活用促進を図るべきである。また、アーカイブと復興祈念公園も未来へのメモリアルとメッセージゾーンとして「悲劇と奇跡」の物語の世界発信基地となるよう、内容充実と誘客対策を講じていく必要がある。

また、拠点への交通アクセスの向上に取り組む必要がある。

⑥住んでみたい魅力ある地域づくり

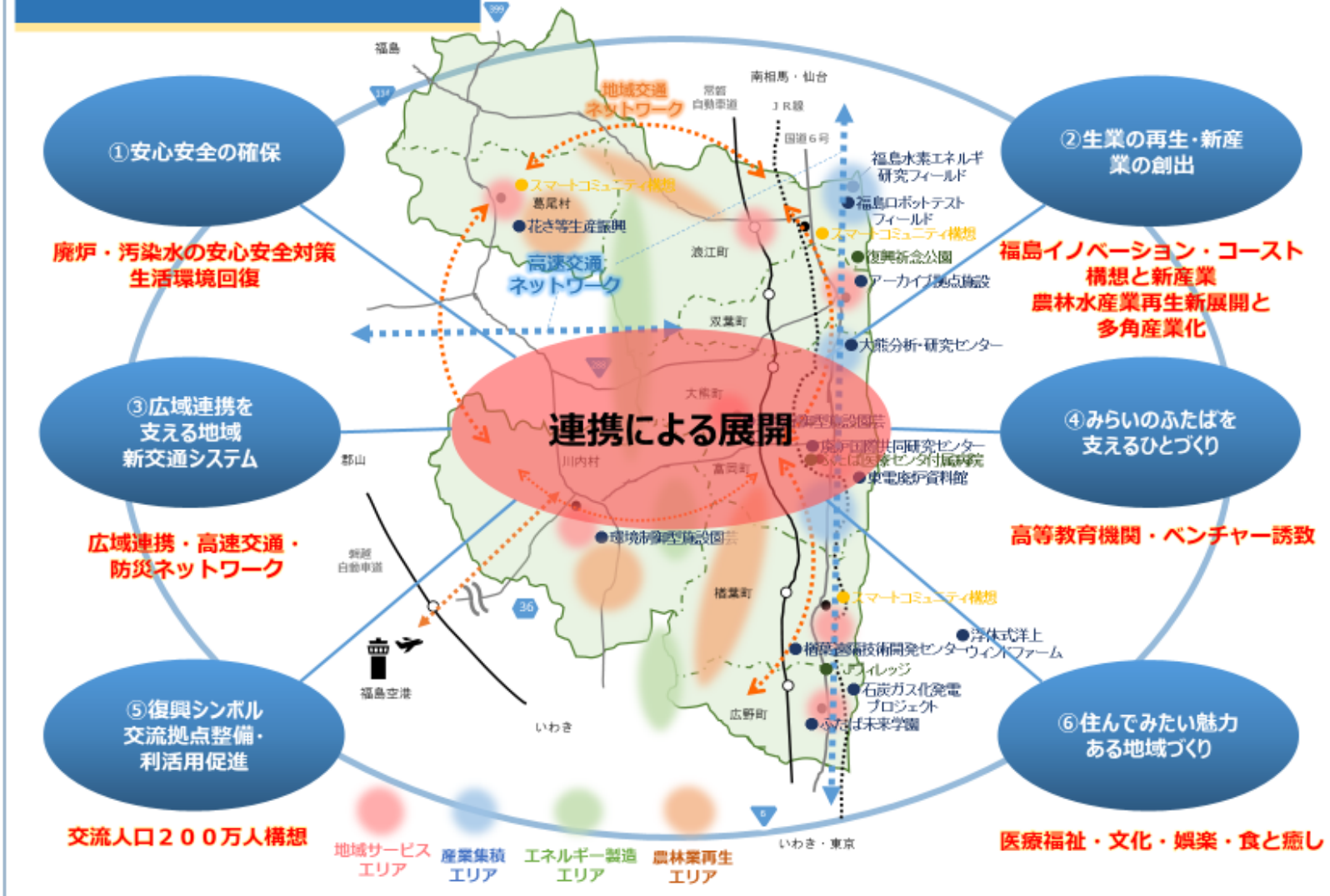
双葉地域の復興は、帰還人口対策や避難者支援対策のみに止まるものではなく、新規人口の定住対策があって達成が見込まれるものである。

このためには、多くの人々が、住んで良かった、住んでみたいといった、双葉地域で暮らしたくなるような魅力ある生活環境を享受出来るようにしなくてはならない。

このためには、五感で感じる生活の感性が高揚したり、人間らしい生活空間であったり、先進的・近未来的な利便性も持ち合わせた地域としていく必要がある。また、育てやすい、健康長寿で過ごせる等、人にやさしい環境も備わっていることも求められる。文化的で心豊かに安心して暮らせる、そんな地域にしなくてはならない。

基本構想〔スキーム〕

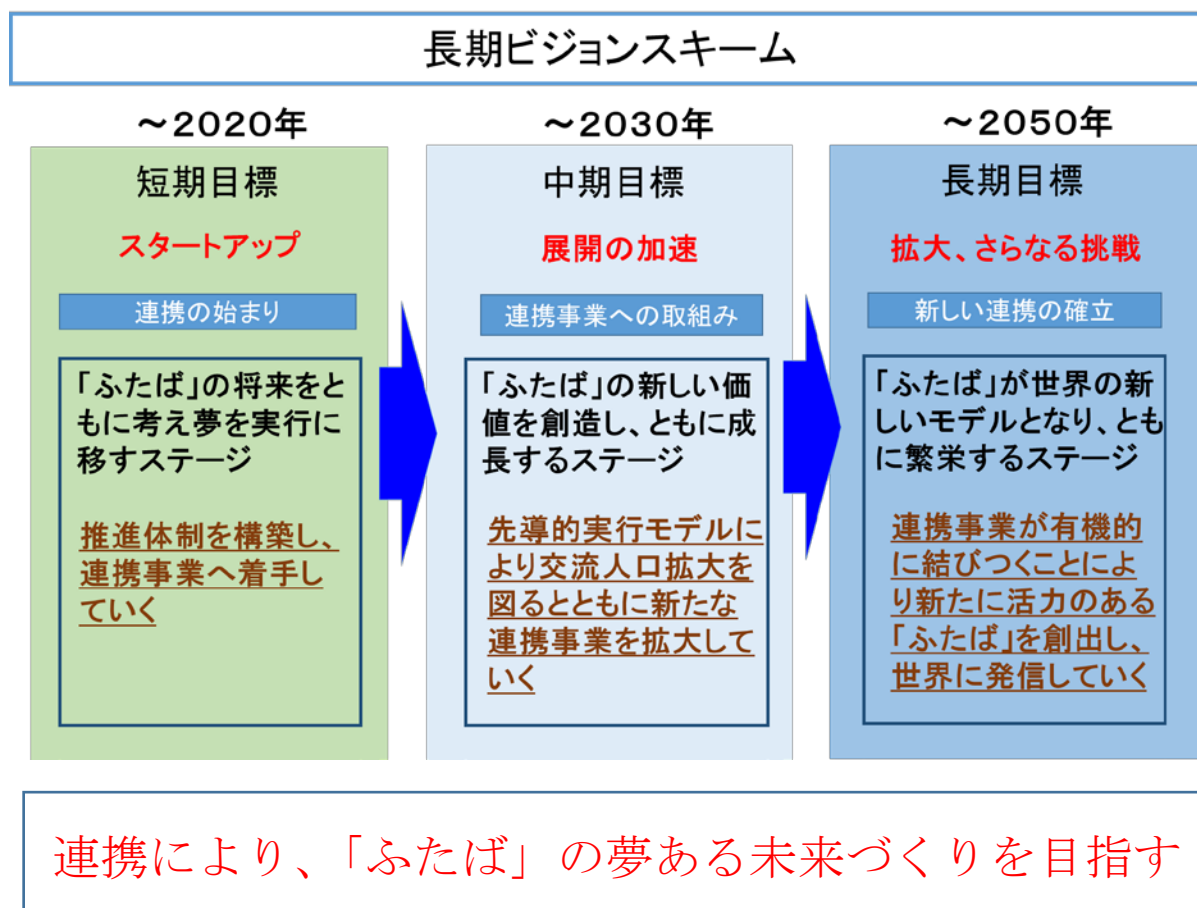
「ふたば」の夢あるみらいづくりを目指そう



(2) 基本構想の目標年次

基本構想の目標年次は2050年とする。

この目標に向け「連携」を基本テーマに段階的に取り組むこととし、長期ビジョンスキームとして次のとおり描く。



○ 連携の構築イメージ

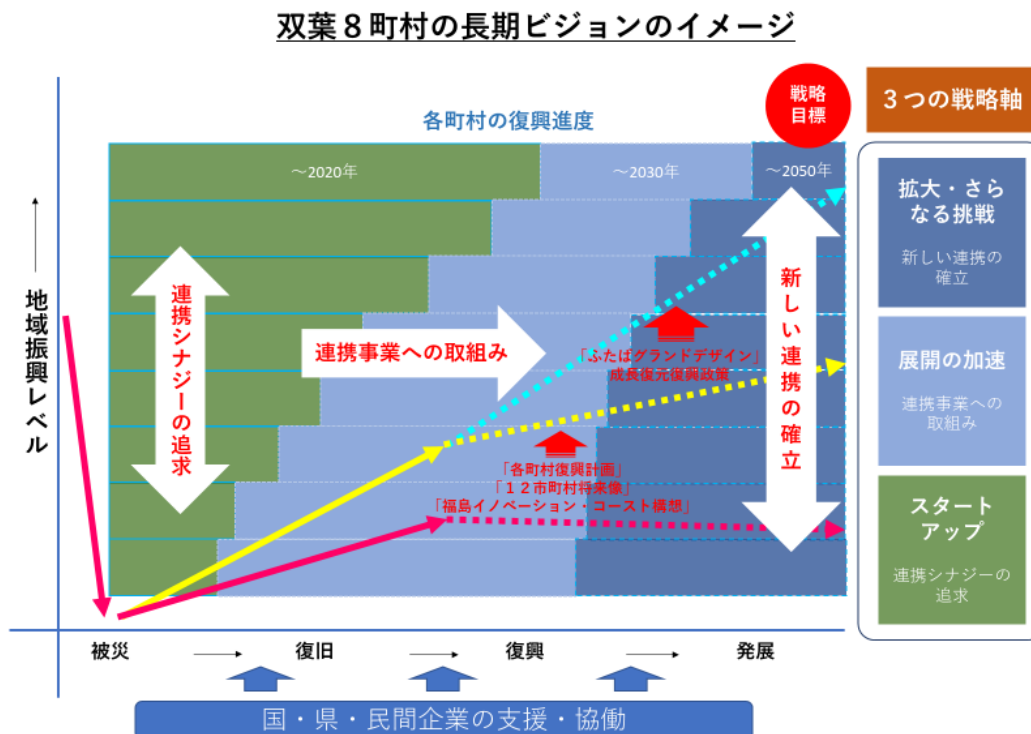
- ・ 広域連携新規事業・・・関係人口・交流人口拡大の施策共有
復興シンボル事業活性化進展への取り組み連携
新規事業等への広域連携による取り組み
- ・ 既存事務事業の広域連携による効率化
 - ・・・8町村共通の事務事業の内、広域の観点から連携を構築
 - ・・・公共施設の広域の観点より集中選択連携連結管理運営構築

双葉地方を広域連携の視点から、取り組むことが行政運営上効率的且つ適格性が構築できる事務事業の連携に段階的に取り組み、ステージ毎の目標を見定めつつ、スタンスの共有化を図り、「**連携の始まり**」「**連携事業への取り組み**」「**新しい連携の確立**」を目指す。

(3) 基本構想の目標達成イメージ

「ふたばの復興は、震災前以上の繁栄を目指す」という共通認識に基づき基本構想の目標達成について、次の長期ビジョンのイメージにて示す。

長期ビジョンについて、双葉地方の人口推移と産業構造の変遷とを比較考証し震災以前の状況を基に、今後の将来に亘りふたばの未来へのビジョンとして提案するものである。



図の表示の考え方は次の通りである

- 赤色線・・・住民アンケートをベースとした帰還復興再生進度のイメージ
- 黄色線・・・各町村の復興計画をベースとした帰還復興再生進度イメージ
- 青色線・・・震災前以上の繁栄を目指す将来像イメージ

それぞれに、人口インパクト・産業インパクトを基に、長期ビジョンスキーム、2020年・2030年・2050年の戦略目標に対し、それぞれのイメージを連携シナジーとして重ね合わせ長期ビジョンイメージを描いた。

「ふたばの夢あるみらい」を目指し、各町村が再生復興創生とさらなる未来へ向けた発展に挑戦し続け、来たるべき新しい時代の「日本の未来社会」を先取りする「ふたばづくり」を「目標とする絵姿」へとイメージしようとするものである。

6. ふたばの将来像

「5. (1) 基本構想」で掲げた「基本構想の6つの柱」の実現化を図るため、「5. (2) 基本構想の目標年次」の「短期・中期・長期」各目標ステージづくりを構築するため「ふたばの将来」の姿づくりを目指し、「福島イノベーション・コースト構想」や「12市町村の将来像」に掲げられた事業を展開しつつ、「ふたばの将来像」を描いていくこととする。

(1) ふたばみらいのまちづくりイメージデザイン

「ふたばの将来像」を描く視点として「みらいのまちづくり」に着目し、基本構想を3つの観点からデザイン化を図る。

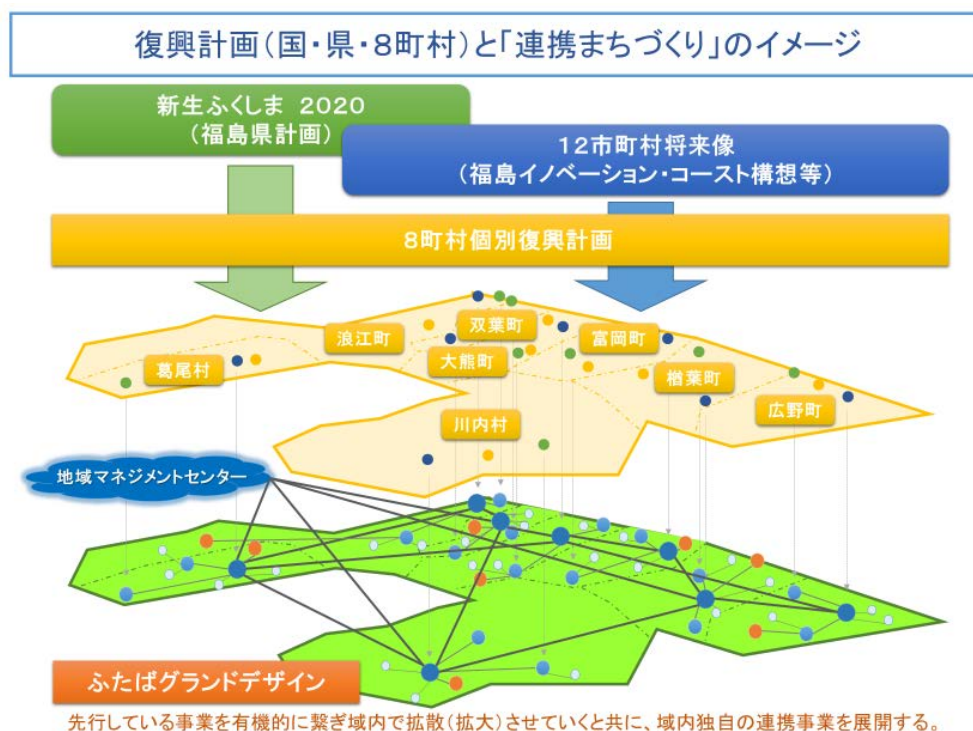
① 「復興シンボルまちづくり」

復興シンボルの拠点形成を図ることを先導的に取り組む。交流人口拡大を基調に多様な取り組みを展開しながら定着人口の拡大につなげ地域の産業活性化を図り、ロボット技術開発や廃炉技術開発の先端地域を目指すと共に、福島イノベーション・コースト構想の進化から新産業を積極的に取り込み多角産業地域を形成する。

② 「連携まちづくり」

「住んでよかった」「住んでみたい」と多くの方々が双葉地方で暮らしたくような魅力ある環境づくりが大切である。

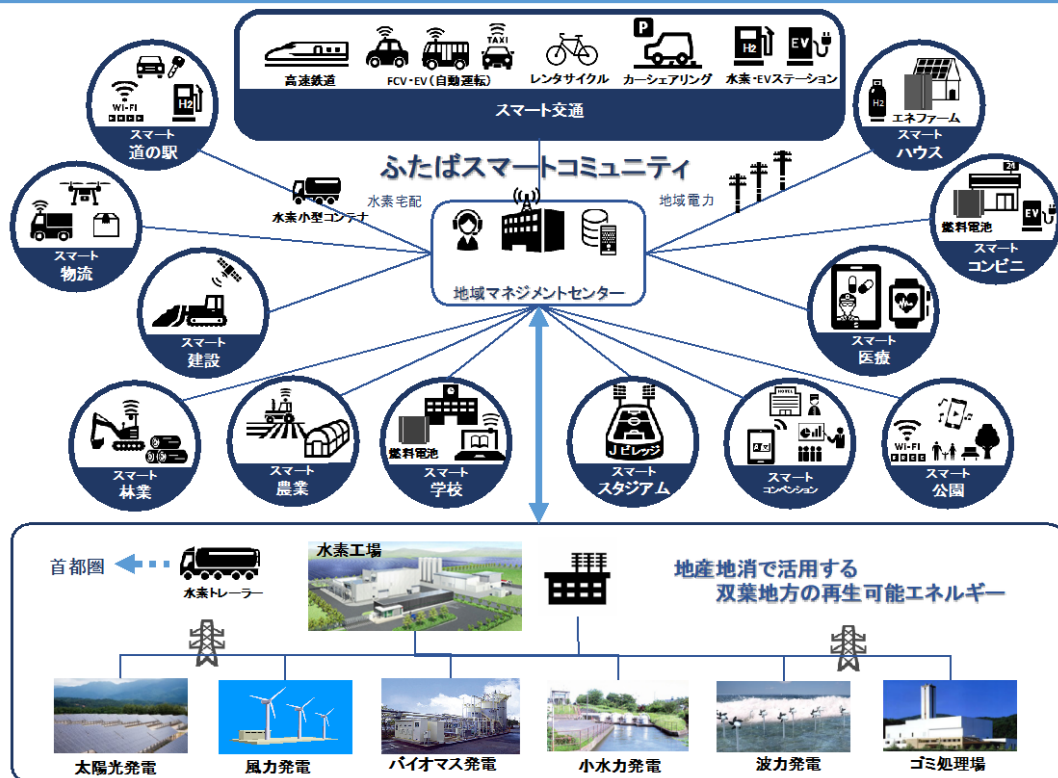
『ふたばの思いは一つ』を具体化できるよう、8町村の連携を深め、住民の方々の「絆」を繋ぎ、高福祉・健康長寿・交流を深られるよう、ひとにやさしい環境づくりを進める。そして8町村の『連携』のスタートアップ・拡大・確立を目指す。



③ 「近未来まちづくり」

すでに双葉地域では再生可能エネルギーの取り組みが進行しており、双葉地域における先進的・近未来型の生活利便性の高い環境づくり、近未来型の ICT 社会と新エネルギー開発とを融合させた未来の姿を描き、その目標に向け連携の拡大を図りつつ取り組んでいく。

(仮称)「ふたばコンパクト・スマートコミュニティ構想
 … ICTとロボット技術で実現する持続可能な分散型エネルギー社会」



(2) 『ふたばランドデザイン』・・・ふたばの将来の姿となる「絵」

これまで検討してきた「将来のまちづくりイメージ」を「ふたばランドデザイン」として思い描く。

『ふたばランドデザイン』・・・ふたばの将来像(「ふたば」の思いは一つ)